57X
51
7

訓幼字義

第二

道德理

訓幼字義巻之二

道 仏 條

慶應義塾圖書館

○道とはよろづの事の従来通りする所の事なり
道字の二ツの意 一朝の道
のことをいふ 大人のもちまへ
敗まる事のやうにして皆其
をすをとるにハ従来通り
することとて人皆之
をかりて

名つきものも休仁義礼智の
ことき五ツの人よりうへ君臣みな
まてこれをおもてとし
おもつてみなもさしらぬかほもさ
道如大路世中屑仁義三者
天下之通也とあるをさし人のまも
りよきものかうそをも分ぬかほをす
るをなにとなくみるやうなるもの
ふるまひをも分ぬかほをす

をみしらぬ人のことをいふてうりて一ツとみて買
人のことをいふさまあり
○道のおもてめいの五倫あるむつまじ
のけきやうあるの時契
をしてて人倫のさまをおもふ
善言数数五典五元と云善
典とい典の常とも
てをみて又五常五倫とも善
天よき婦人房団なの五つの交り春

等を以もかなでまなびてこれを
其ことを考ることまたうの倫
をおるよあるべし（ハの）訳まて別而
君臣のつゐ多（君臣の）ハ
其ことをしるし又よのつゐるかひよ
而訳書十ら門かの其列あるもお
夫婦の別あることを夫婦の別又
兄弟のつゐ年のもの幼の弟を事

多かへさる其ことを兄弟の序と朋友
のつゐるかむよ信をまりてこれを
書るさみゝよ十ら其ことを朋友の信
とゝことの人わ尚さわれとこの五
の中ハこれうをとなてかし禁ぬ
十倫と（髪毛）ハ名同意
うそうもゝ此ハねよやこのもの
を天下のことを通ゝ

●五倫のおしへ仁義礼智を云て人
五倫を人のおよるところのまことを
名づけ仁義礼智を云のまことを
通してこれを云仁といへ人を言一人の上か
みのそのの道をきそ言なすものそ
きれをの第一のそ和といふのそ
の第一のそ少しでも違将棋
をもつてするのそ
をいふそれ一ツを
●五倫のおしへ仁義礼智を云て人
五倫を人のおよるところのまことを
名づけ仁義礼智を云のまことを
通してこれを云仁といへ人を言一人の上か
みのそのの道をきそ言なすものそ
きれをの第一のそ和といふのそ
の第一のそ少しでも違将棋
をもつてするのそ
をいふそれ一ツを

道二ハ名のりまことの車ふみあらそ上ふ
つまそこれを云ふ道の五名ふおの
ものまも人のおのおの一めんこころお
若いまなまこの曲のもの外
その大まあふ仁義礼智
をそのの大道
●道のお作の事
ふ五倫をおもちて
ふ五倫のもの
まくみあとこ

玉帛相接ぬるは日用當然のてと
もとより云ふをまたず●宋朝
もまた
```
```

後

●論語曰志於道云々
何曼申新道也
居仁由義 如孔子之

後●易の系辞上伝云形而上者謂之道
形而下者謂之器云々針灸施功
皆形而下者無理則不能道也施功形而上
云大極形而上云々道也施功形而下
器也と見宋朝の板本理気の板ゝ下
ニのこゝハ

おゐこれを用あてゝおゝして年也施
おせをし以て

人生のはかなきものをうの
のみいむゆるをとそをうの道
をうまにまよをこれを形向
ありもこれを形向
二一つ同のをうの
をの言をうのをくいう
天
の法よ形をうの
をうまにまよをこれを形向
をうまにまよをこれを形向
をうまにまよをこれを形向

卦文のおをさして
の法よ形をうの
をうまにまよをこれを形向
をうまにまよをこれを形向
をうまにまよをこれを形向

●中庸曰天命之謂性率性之
道修道之謂教

道せとそろう並列 手足のはたらき
をつかさどる 脊髄 作用のさまざまこの屍式の出来事
おのずから或る 人のさまざまの言葉
仏を出てつねのおしえを
下の国という

ものごとの人々のおもものみな人の性
おのずからものごとの色もおのずから
品をみあるとき人多きものの着
まお和睦して右往又夫婦のうち
を表うれたる所あれば
のむりのところにて性のあ
いてをつかさどる一定人の名をそなえ
の人倫道をもって本として礼楽

み言を加へてうたを献じ
を以てこらへ
八性よきひとのそ
五倫のまじはり
するをきいて
このむものを
をよそのやう
かの魚をや
あるをみて
道をいふをきいて
そは以来
一生のうち
うのうち仏
毛頭未聞の
をいふにて
しこれを
を好とせり
てかうたを

可離也道也者不可須臾離也可離非道也是故君子戒慎乎其所不睹恐懼乎其所不聞莫見乎隱莫顯乎微故君子愼其獨也喜怒哀樂之未發謂之中發而皆中節謂之和中也者天下之大本也和也者天下之達道也致中和天地位焉萬物育焉

十四

先王以此治天下

●性道教の三つの一言門等の指例

●性道教の三つの一言才悟の多少の等級の原由

仏教の多くの等級の原由

そこで三つの一言門等の指例

●性道教の三つの一言門等の指例

●性道教の三つの一言才悟の多少の等級の原由

仏教の多くの等級の原由

そこで三つの一言門等の指例

ふることくを現ずてそう漫ノ誰
南主安う淮南ふこ倩性向りこ抵
通しそてあうまうまあれう
陀そていやまあを
●性まあて人のよう如てふ当そふ
てふふ就てふ
さいやまい
かしのちつのあうやまれも
てふし実相似せといてそのふみ

つるそふとまいてそ侯ふ人の
めてこまのそふ
ふし通日陀ふ通日別ふ
宗立人ふ通日仁ふ
る埼もふまうまそふ
平そふてすまあん
名ふのふをあ
事ふあ内まれを作ふの
事ふまのみのおらくとろよ陀

[illegible]もこの一章の仁義を
[illegible]かるがゆえに仁義を
人の道とそうとうとうをいう
上下をあれ[illegible]的なおの同あて
なきうてう三軍の士気ひとう
なきうれも軍はうてう
[illegible]なきみ四天道一向に天ほをん性
の学[illegible]ようなきて首も性もとふ
みなて差おかしきみの[illegible]ほ[illegible]ことう

[illegible]ら性あう
の道のあかふ
[illegible]ことそ
[illegible]ことあ
[illegible]ら
[illegible]
[illegible]
[illegible]

者皆不服此裁判ヲ
係ノ自宅ニ
ラルヽノ
ヲ
ヲ
ヲ

このさ道理のかと
五二 伊勢の二氏 男
淳和の侍を等
ここをさ之の
一度の祝な
私を私するのそんと
至孝混こと
重て先儒の抗

不舍晝夜

先
二〇 陽明子いはく 爲手
不以其道得之不處
也 と

手ものてをい作
のまよもの みて
にとそう又爲
の物を高 手高の
私をこう 是私
の心まあるよ
すること

君仁

造次必於是顚沛必

而已矣りて又道不可不相為謀ら
又能仁道不行而已矣りて又道不可不相為謀ら
和合の基あるとも大ふ
ともあれども大物の人衆の
當てはまりてそれも
當てはまらざるものの
當てはまりてその能い當てはまる
かかりて故ぞ道二字となりて

徳九條

○法令ハ公布シテ施行ス

○法令ハ公布ノ日ヨリ施行スルノ例ヲ改メ法令ニ特別ノ定アル場合ノ外ハ公布ノ日ヨリ起算シテ満二十日ヲ経過シタル日ヨリ施行スルモノトス

止

みそ、平之助を
通可二言而一也、中庸ニ天地之
日生ニ萬物一、天地之
存しさる
口禮記礼運篇ニ徳有二行道一有
得お自也と
て、云ふまでもなく
とそ、日本書紀ニ
ふ、

身の字を、かいて有序
おこゝろと訓ませ、
そ、大抵なるみ
ててそれ自分といふ
語をかねの抜よふ
の抜も、己字をかいて
ふ、

●上の抜のてくに異見は
とあるのいもてきに

吐号

の教行等を平の法あおぎて
以道の字よりくらふおもふに人みち
てゆくをいふ
一道法の二字を先仁義礼智の五名
おのおのとくべきいはれ道 振れ徳 辰
れ仁とをてきいはれ仁の徳と
をもつてあるをやてよし
おの道をいはゆえんかり 志村道と

おのおの人の生
道をゆく歩んとすることを
明を法めて百をおもてとき己の
みまうこころをもつて道おもんと事物
物徳といふきかおもてなまを住所
をもつてをしへ普門をまつ
住してを物物
伝教住生をもつて
まをまこととへ辛苦よ

有而仁者の治上（地位の治上）
学ぶもの（於上）而して中
旧弊を一（一）掃し及ばざるところ
而あるもののうち（ち）お擾を生ぜず法治の
仁者まかりてのち（ち）伝ふるに未
治をもてかたく（く）掃ふまでのこと
未仁者（ざる）をもて（て）伝ふるところ（訓）
なり（り）而して（て）不

仁我邦（邦）政治家の一般（般）
まりの弊（弊）あり（り）
政治家（家）の唐（唐）
みてをまもる（る）
義を（を）今の勇（勇）
経て（て）其のついに（に）
の高（高）
とつて（て）
ことを（を）

（邦）定められる
（り）
（唐）
（に）
（て）
（て）
（て

口清地方にて多く明石縞と称し
古くより久明しまを織出して
居るの地のあるを
かくてもいいてらうまてかくれ
まいあやゆゑしまをよみのてう
なくて多し大抵縞を縞多縞
縞筋縞合縞
しまのてふ

ありをまて大縞をこゝろみにあかをさして
其他を黒とす
ものにて明石縞と称するの色にて
これ明石縞とてうかゆきて
昭明縞をあるの地の
あるこまて

縞の大概は明石縞北上雪縞筋
昭明縞をあるの郡山地の
あるこまて大

功の性ふあるとてみりとの事ふ
ゝて名まるあの白基石をあらう
ふゝしゝをれ話をスヤ事ふ話
をりて平悟明石不大声と色と
あをおふ伝まる井元之明治と
ありこの如何のゆよ多く
ゝて、伊日きて叫り宇宙ふ
来ふのてゝよて雲雷昧昌元
而庵万事着也とふをふ
ふおむふり話ていおをを
ふまを
●宝珠の明あを叫なすとふてそ
かふおるやいよこと叫ふのあふ其
玄奇のほをまし
ふふお望ふ叫し法をのをを
ましふ明法ていおを月ふ

理

●理とゝいふ物のまゝの事ありて里の字をかくに本里の本あるを以て
說文云
里は田と土とに從ふ
理は玉に從ふ里の聲
里は田と土とに從ふ
天の文は日月星辰の如きあり
地の理は山川道路のまゝ
くのまれあるを以て五倫のまゝ

倫理と云ふ名目又は其の事実を
なす人身と脈理腠理とを混
結合するの理を究めざる
ふるを始終とし
人生の上に実際と
ありて其の條
とも云ふべからず
はその事

●ほをまぶるの
のをつうの
腹痛
第五症候
夏の
してやまず
てくる第五症候
これあるときは
ものである
ものの

大極図及三文性
五り為ス統繰又名
以テ凝集而成形ス
等ニシテ人ヲ叩テ
等ノ転動
第ノ上ニ
故ニ一ヲ
同ジク
と云ヒ伺ヒ

而ども此等の
人は聖者の
唯雄男女のて
●体用とそ無
故有三千大
用を作為
立地を道
手等をみて
を体と
又中
情也真主
性道を
道と用也
主宰の性を

言句を玩ぶ
天帝者天命
道を指示
又人の
体と

法名両竜のまことをひそかに玉い
功すくときしに雲竜春草のごと
をみすこてまおわて栄華そまの
出家かりきそかとこととて春を
法世祝をよろこそうそうをり
祝よりそあるこれとこそうそうら
をみてその頭語すてあかをみ
気のれ法をはそ投の息うかみ春之

ものねりまをよ根あるとと
事をまつとをの
祝をまつとをの
のごとくまりそ
のごとくまりそ
まあるてもをへ
まあるてもをへ
又ごとの物のまても
又ごとの物のまても
●大学の教おあり号の
系統より高祝をあり先偽名
をいて学号の根和をまを投みま卍

●窮理の段より

体

神無方而易
[illegible]
[illegible]
[illegible]

例えば二の外足をさして
作ってすって十三の内一寸もって
み用として下さい場の高の好き多く
ある時或る時用いる時と云
卦のもとから先をさして
用いるようにしてみて（現在の事）
もちろん使用のこと

きて二本ある動のところを作ること
四面ところを用とする二本ともに
よって外卦の第四爻
その作ようあるをしてこの震為
不こらけてその第七
れば地の作ようあるをして博奕
指数してやよさなるを地の作ようを
人の身よりていつて字を数の
見て作ようあるをしてこの六の爻

不動とこゝろ人の作りこれを菊如上
と知てる時は菊の戸開大ふの
菊如の作あり菊の物を作る
とこゝろの起をよく考へ菊の戸作つり菊を菊
如作の意あり菊の字の菊を用
てもよし菊の人(まい)
物の作りを作るものゝ人(まい)
作用をもて作るもあり

連

●程ふの西作

これの作用
とこゝろの起をよく考へ菊の戸開大ふの
菊如の作あり菊の物を作る
とこゝろの起をよく考へ菊の戸作つり菊を菊
如作の意あり菊の字の菊を用
てもよし菊の人(まい)
物の作りを作るものゝ人(まい)
作用をもて作るもあり

聞てこそあれ是の如く佛語そこの
(中略)
佛清淨國師漆現とつてる佛の事者
經の疏よりそ
のまゝ(わたる)この(文)ごとく引れのてし佛まよ
多くこゝ文經よのてんよ珊瑚
無膜等等赤此已在不定度
未一在不定そこの上の語を
因まこの如此此を指時

手堪(にき)雲深まの如く拜をいまその
指くけまなしてこの拜ありまの
まゝこまるけまこの拜ありまの
佛てあり云のまこの拜をいまの
云都まて因まこの如く無此
なし是を珊瑚世脫等等無已
是云ひけまして有ふあるを
ゝさりけまあるまの又

不是先不是後不是生滅住異の
我此の土佛滅度せ眼のこと
ごとくへいおよび羅刹そこと 永嘉
の他菩薩らいまいをんのをとふ
へ叫をこのとき 佛をほめて
舟すおよびて 佛を讃え
●或の云老佛の時 嘉文此の
ごとくへ 胡 ことを来 語
是の時の後 高叫の後

七十四

書
ごとをあり 佛 祝福の中も
叫ことをもって 佛をほめ
それ中四の 書ての
を以て人おごふすこと多し 仏の禅
語よりつをを以て云はしまいや 活潜
地のこと比の中を 活結こと これを修
まて菩提をあこと 書ての
まやおをあこと 毎の
てをみも法 西方にて法舟

天下の人を不思議な事を談
話し見苦敷探偵
とりそろえてその
おそろしいそゆる
人鬼の実をやうな
孔子これをおくしと
とらえて
そ
ありきて

●或の云ふ所の如く宋朝之学不可
也此年也云人しも是不待有此年也
不可也此年此甚学し所以不純年言
人而教年 仲尼と
●或の云ふ所の如く堯の学ぶ所
ありまさしく仲尼

ふ所の如く堯の学ぶ所ありまさしく仲尼
対
の学ぶ所ありまさしく仲尼を対答
のごとく仲尼堯の学ぶ所ありまさしく仲尼
の如く仲尼堯の学ぶ所ありまさしく仲尼
の如く仲尼堯の学ぶ所ありまさしく仲尼
の如く

察察為之、其政悶悶、其民淳淳。
（王弼理尽性至命）
（河上公治身治国）
（老子）
（荘子）
（列子）
（淮南子）
（文子）
（抱朴子）
（心学）
（心学）
（心学

す

一字を以て括るへからす
七字を以て括るへからす
其名を以て括るへからす
其名を以て括るへからす
○同藩渓の右種図解左に載
種ともに図解左に載
而
畢竟其種名を書ともしかれ

也とあり

其一種一種の名を探しるものなり
この種子の図解の世声世良
さるものなるもの
図解の世声世良
其名称なるもの
其名を右種名を図
其名を種名を図
と其名なるもの
種名を種名
種名を種名
種名を種名

きれいを捨ててこそ
もうす

●三人の坊っちゃま事実みだて
今よ事多かふ故よ事を捨てい宅証
と云居よ事ろてを捨てい勿敬と
のまふ心ろおもおもて一行の深
き術、玄ろて此ろ中庸ろ云ふ
孫子曰、兵貴勝不貴久、言上下家や物
語ろ吾無行而不(孚)二三子者是也

の繋辞ろ出ろう
いう國ろ云行の中よふ
のくもろ世務ろ
同よの名言ろ人の
朱子の解同よの言ろ
てをろう先人
事ろをいろうもろ
ろ物のてろろ

道ろよろく
先ろ

抽すること宋の時國史又周のお伝あり
その中に右極圀抔を載るゆへ自ら極
而為抔自為のことをもて極の字史
おゐてのことなり然るに極の字史
の中に極圀抔等のはなし
甚おかしとて
このみを改いさゝか記しおかん
とそれは周おゐて
のやう自為のことをもて

老子經云有物混成先天地生寂兮寥兮獨立而不改周行而不殆可以
爲天下母吾不知其名字之曰道又云
惚兮恍兮其中有象恍兮惚兮其中有物窈兮冥兮其中有精其精甚真其中有信自古及今其名不
去以閱衆甫又云谷神不死是謂玄牝玄牝之門是謂天地根又云綿綿若
不可名復歸於無物是謂無狀之狀

●畢竟理無二致

●畢竟理無二致

無象之象是恍惚と云ものにて
かく一圓の象もつかく見ものあり
てて其第知ることはすくなし
先儒のいふ所未有天地之先畢竟
有斯理とこそ
同ものいふ所
特長神と
のこと

一一メ梁の傍大士の偈こく

とはこれ
極高極の名
●無声無臭
出る上天之載無声無臭
その事
のこと
のこと

QL57X
M451
v.7

止